様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　１日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７２００５２
研究課題名（和文）　明治期東京の歌舞伎における小芝居興行史の研究

研究課題名（英文）　A Study of Tokyo *Koshibai* Kabuki theaters of the Meiji Era

研究代表者
吉田　かつら（佐藤　かつら）（YOSHIDA KATSURA〈SATO KATSURA〉）
鶴見大学・文学部・准教授
研究者番号：２０４１００４５

研究成果の概要（和文）：本研究は、歌舞伎の小芝居の実態を明治時代全体にわたって正確に把握するための基礎研究である。主な成果として、明治 10 年代から明治 25，6 年について、東京の小芝居各座の所在地･座主やその交替などの様相を実証的に明らかにしたという点がある。また明治 23 年の劇場取締規則改定により、行政から正式に劇場として扱われることになった東京の小芝居が、新規則による改築・移転に困難を伴い、2，3 年後には小芝居各座の統廃合が行われた過程が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This is a basic study of Tokyo *Koshibai* Kabuki theaters of the Meiji Era. *Koshibai* refers to the minor theaters in Tokyo popular among common people. The purpose of this study is to obtain more information about these *Koshibai* theaters. This study clarifies the locations of Tokyo *Koshibai* theaters, their owners, and their changes in ownership from 1877-1893. In August 1890, the regulations concerning *Koshibai* theaters were tightened by the Metropolitan Police Department. The *Koshibai* theaters had difficulty in keeping to the new regulations, and some of them folded after a few years.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	800,000	0	800,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	300,000	2,100,000

研究分野：近世近代芸能研究
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：歌舞伎、小芝居、興行、東京、明治

１．研究開始当初の背景

(1) 研究の全体構想

本研究の全体構想の根本には、従来の研究では十分に解明されてこなかった近代化過程における歌舞伎の変質を探ることがある。本研究においては、歌舞伎の変質期において観客の人気が高く、それゆえ歌舞伎の変質過程を知るために欠かせない小芝居の実態を

探ることが必要であると考える。小芝居とは、官許を得た大芝居に対し、歌舞伎を興行しない見世物として許可を受けながら、実際には歌舞伎を演ずる場・興行に対する名称である。小芝居は、大芝居に較べて安い観劇料で見物ができ、大芝居を観に行けない観客をも包摂し、歌舞伎という文化現象の底辺を支える重要な存在であった。観客の立場に立った場合、集客力の大きかった小芝居の実態を探ることは必要不可欠である。小芝居を視野に入れることにより、はじめて歌舞伎の当時におけるあり方を全面的に捉えることができると考える。

小芝居の実態を探り、ゆくゆくは大芝居の興行実態や演劇的内容と対比させて考え、小芝居・大芝居を含めた歌舞伎の全体像を、当時の文学や美術といった分野とも関わらせながら歌舞伎の変質の様相を捉える必要がある。

(2) 本研究の位置付けとこれまでの研究成果

これまで小芝居については、本研究代表者以前にはほとんど実証的研究がなかった。阿部優蔵『東京の小芝居』がもっとも詳しい小芝居に関する著書であり、ほかには回想録などが多い。したがって誤りや未解明のことも多く、本研究代表者は小芝居について正確に把握すべく小芝居の実証的研究を行ってきた。ただし、本研究開始直前の 2007 年 2 月に、小宮麒一編『歌舞伎・新派・新国劇　上演年表　第六版（明治元年～平成十八年）』が刊行された。これは、新聞・雑誌・番付資料より作成した小芝居の上演年表を含むもので、本研究の目指すところと重なる成果もみられる。ただし明治初期については小宮氏の年表をもってしても不明なこともあり、また、各座の興行実態や役者の異動について解明すべき点は多くあり、本研究を行う必要はあると考えた。

これまで本研究代表者が行ってきた小芝居の実態解明の成果は、主に以下のような点に集約される。

① 幕末から明治中期における江戸・東京の小芝居の制度的規定と興行実態について。幕末の宮地芝居の実態の一部解明と、天保改革以後の小芝居が一度禁止されながらも再興して興行を続けたこと。明治期の小芝居が「道化踊」という見世物として規定されたこと。小芝居が次第に盛んになり、明治 23 年の劇場取締規則改定により、見世物から劇場に昇格したが、このことで生まれた大芝居（大劇場）と小芝居との軋轢の様相。

② 明治期における歌舞伎の興行実態と演劇的内容について。演劇史において埋もれていた中島座の興行実態とその演目、特に大阪で初演された芝居を多く舞台にかけたことなどについて。また、三遊亭円朝の人情噺が劇化された様相。明治期に勃興・流行した新聞と歌舞伎とのかかわりについての、新聞記事の脚色、新聞連載小説の脚色といった点からの探究。

(3) 本研究の課題

以上をふまえ、歌舞伎の変質の様相を探るために以下のような課題が設定されると考えた。

① 小芝居の制度的規定・興行実態の、明治期全体にわたるより正確な把握。

② 小芝居・大芝居を統合した明治歌舞伎の興行史の把握。

③ 小芝居・大芝居それぞれの演劇的内容の把握。

④ 明治歌舞伎と周辺文化とのかかわりの把握。

この中で、本研究においては、①の小芝居の制度的規定・興行実態を明治期全体にわたってより正確に把握し、将来的に歌舞伎がどのように変質したのかということを取入れた明治歌舞伎史の再構築を行うための基礎としたいと考えた。

２．研究の目的

上記の研究の背景をふまえ、将来的に歌舞伎の変質をとらえ、明治歌舞伎史の再構築を目指すために、本研究においては、明治期の小芝居の制度的規定・興行実態の、明治期全体にわたるより正確な把握につとめる。小芝居の興行実態（演目、役者など）に関する基礎調査を行い、明治期東京の小芝居各座の興行史と小芝居の総合年表を作成することを目的とする。具体的な解明事項は以下の通りである。

(1) 小芝居各座についての基礎調査。

① 制度的規定の明治期全体にわたる解明。

② 役者と演目を中心とした興行実態の解明。

(2) 小芝居各座の興行史と総合年表の作成。

① 小芝居各座の興行の変遷史を作成する。

② ①をふまえ、大芝居の動向とも関連させた明治期東京の小芝居の総合年表を作成する。

(3) 以上の成果をふまえ、小芝居の演目と興行実態について新たな研究視点を模索する。

３．研究の方法

２．で記した諸点を実際に解明するための具体的方法は以下の通りである。

(1) 小芝居各座についての基礎調査。

① 制度的規定については、東京都公文書館所蔵の行政資料を中心に調査・収集・分析を行う。

② 役者と演目を中心とした興行実態については、番付資料や新聞資料、さらに関連図書などの資料を調査する。金主・座主・興行師・観客については、新聞資料や行政資料を用いて調査を行う。主な所蔵機関は早稲田大学演劇博物館や東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）である。ほかに、関連図書を購入し、内容を分析する。得られた資料から、演目や出演役者、その異動、また座主や興行のあり方などのデータを入力する。

(2) 小芝居各座の興行史と総合年表の作成。
① 小芝居各座の興行の変遷史の作成。これまでの事典（『演劇百科大事典』など）や先行研究（阿部優蔵『東京の小芝居』など）では、小芝居各座の所在地や座主、座名変更、出演役者といった情報について解明されていないことや誤りもあり、本研究ではさらに踏み込んで、(1)で行った基礎調査により得られた一次資料を用い、より正確な小芝居各座の変遷史を記述することを目指す。なおこれは、すでに述べた小宮麒一『歌舞伎・新派・新国劇　上演年表　第六版（明治元年～平成十八年）』における小芝居各座の興行年月と演目、主要な出演者を明らかにした上演年表とは異なり、演目と出演者だけではなく、金主・座主・興行師・観客といった総合的な情報を取入れたものを目指すものとして想定した。

② ①をふまえ、小芝居の動向を正確に把握した上で大芝居との関連を考慮し、総合年表を作成する。大芝居関連の書籍や番付などの資料を用いる。

(3) 小芝居各座の興行史と総合年表を作成する過程において、役者の異動の様相や、小芝居の特徴的な演目から知る興行実態など、新たな研究視点の発見に努める。

(4) 以上(1)(2)により小芝居の実態を正確に捉え、(3)で今後の展望を開く方法を取る。

４．研究成果
(1) 小芝居各座の基礎調査とそれをふまえた各座の興行史について。
① 明治 10 年代から明治 25, 6 年にかけての小芝居各座の所在地・座主とその交替・座名変更といった情報について、東京都公文書館にて得られた行政資料や、明治新聞雑誌文庫や国立国会図書館にて得られた新聞資料、さらに早稲田大学演劇博物館にて得られた資料などをもとに整理し、現在得られる限りの資料に基づく具体的な様相を明らかにした。また、明治 23 年の劇場取締規則改定により、見世物「道化踊」から正式な劇場、小劇場として規定された小芝居が、新規則の規格に合わせるための改築や場所の移転に困難を伴ったことの具体的な過程や様相を明らかにした。小芝居各座には消滅に至った座もあった。東京全体で見ると、明治 10 年代から小芝居が存在していた麻布区、牛込区、下谷区といった地域から小芝居の座が消え、かわりにそれまでの深川区に加えて、浅草、神田といった下町地域に小劇場が増加したことがわかった。小芝居の明治期における発生と展開について、重要な一過程を実証的に明らかに出来た。なおこの成果は、「道化踊から小劇場へ—明治前期小芝居各座の興亡—」として『国文鶴見』44 号（2010 年 3 月）に発表した。

② 小芝居各座の上演演目について、小宮麒一『歌舞伎・新派・新国劇　上演年表　第六版（明治元年～平成十八年）』にみえない興行記録を見出した。たとえば具体的には、明治 16 年 2 月深川・宝木座の上演記録（「碁盤忠信魁勝色」「桃山御殿朝鮮譚」「当的神明社掛額」、国文学研究資料館抱谷文庫所蔵辻番付による）、明治 17 年 5 月深川・宝木座の上演記録（「慶安太平記」「鐘供養日高譚」など、東洋文庫所蔵辻番付による）などである。また、早稲田大学演劇博物館・阪急学園池田文庫・東京大学国文学研究室・国文学研究資料館・大阪府立中之島図書館・西尾市岩瀬文庫などにおいて、明治期の番付・台帳（歌舞伎の脚本）を新たに収集（複写）し、明治期の新しい芝居や出演役者についての資料を得た。たとえば、阪急学園池田文庫における「稚桜真砂児」や、東京大学国文学研究室における「新形蒔絵護謨櫛」などである。さらに『仮名読新聞』や『歌舞伎新報』など、また、歌舞伎の舞台を草双紙という読み物に仕立てた正本写や、一枚物の資料、講談の作品辞典などを購入し、演目と出演役者、役者の異動について分析を始めた。これらの情報の統合・分析と解明にはなお時間を要する見込みで、今後、演目を含めた小芝居各座の興行史についての論考を準備している。

(2) (1)の②と合わせ、小芝居各座の明治期全体にわたる興行史と総合年表を作成中である。この成果についても今後発表すべく準備している。また、(1)の①から、各座の所在地での存立状況（所在地はどのような土地であったのか、各座はその土地においてどのような存在であったのか）を解明するという新たな研究視点を得たが、今後もこうした新たな視点の模索を続けていきたい。

(3) 以上、本研究で得られた成果は、明治期の東京における小芝居の具体的なあり方の

一端をより詳細に明らかにし得たと言える。このことで、当時の歌舞伎の観客が観ることのできた小芝居の具体的な所在地やそのあり方が見え始め、また、大芝居と対比して考える糸口もつかみ得た。
なお、2010 年 4 月に著書『歌舞伎の幕末・明治—小芝居の時代—』（ぺりかん社刊）を上梓した。これは本研究の直接の成果とは言えないため、５．の主な発表論文等に記すことは控えたが、著書をまとめる過程において、小芝居の資料を見直し、略年表も作成した。これは本研究にも大いに役立つ作業である。
今後は、研究成果についてさらに公表をすすめ、将来的には小芝居についてのデータベースを構築することも考えたい。さらに本研究の全体構想である歌舞伎の変質の様相を追うために考察を進めていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
佐藤かつら、道化踊から小劇場へ—明治前期小芝居各座の興亡—、国文鶴見、査読無、44号、2010、29-38

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　かつら（佐藤　かつら）（YOSHIDA KATSURA〈SATO KATSURA〉）
　鶴見大学・文学部・准教授
研究者番号：20410045

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：